資料4－3

国史跡陸奥国分寺跡発掘調査　遺跡見学会資料

－陸奥国分寺鐘楼解体・復元修理工事に伴う調査－

仙台市教育委員会文化財課

令和元年 11 月 30 日（土）

調査の概要

遺跡名　国史跡陸奥国分寺跡
所在地　仙台市若林区木ノ下三丁目
調査目的　鐘楼解体・復元修理工事にかかわる遺構確認調査（第 30 次調査）
調査面積　約 70 ㎡
調査区間　令和元年 11 月 11 日～12 月 6 日（予定）

仙台市では、陸奥国分寺鐘楼の解体・復元修理工事に伴い、鐘楼の基礎と古代の遺構を確認するため発掘調査を実施しています。陸奥国分寺の鐘楼は東日本大震災と経年劣化および蟻害により倒壊の恐れがあり、解体・復元修理工事を行うことになりました。鐘楼を解体した後、建物内部を掘り下げたところ、川原石や古代と近世の瓦の破片が面的に広がっていることが確認されました。鐘楼の建物の基礎構造は、平成 17 年に発掘調査を行った仁王門とは異なることがわかりました。

国史跡陸奥国分寺跡について

国分寺は 741 年に聖武天皇の国分寺建立の詔によって、仏教の力で国を護るために全国 60 余国に建立された寺院です。陸奥国分寺跡は現在確認できる最北の国分寺跡で、大正 11 年に国史跡に指定されています。昭和 30 年から昭和 35 年にかけて学術調査が行われ、昭和４７年以降は整備のための調査が行われました。その結果、伽藍は築地塀と溝で囲まれ、築地塀の規模は東西約 240m、南北はそれ以上で、内部は南大門、中門、金堂、講堂、僧坊が南北中軸線上に並び、中門と金堂は複廊式の廻廊で結ばれ、鐘楼、経楼、七重塔等を配した大規模な寺院であったことが分かりました。また貞観地震（869 年）の際には大きな被害を受け、陸奥国の復興のため、多賀城とともに大規模な改修が行われたことが、これまでの調査・研究から明らかになっています。

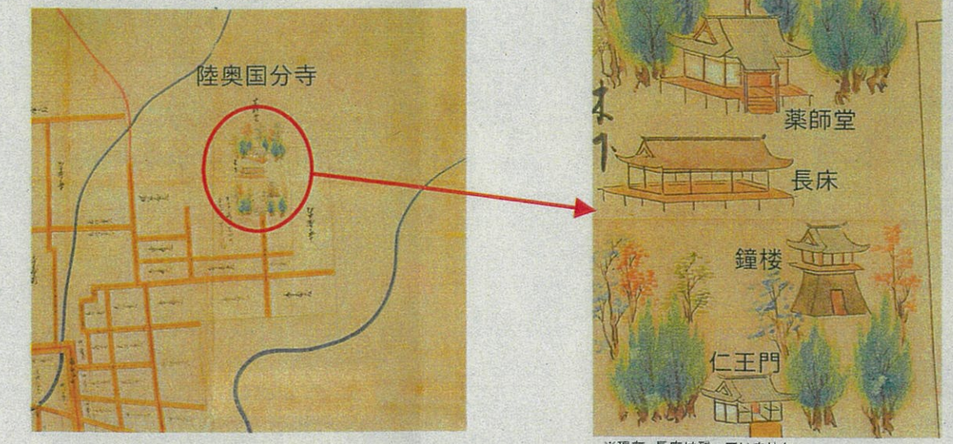
境内には 1607 年に伊達政宗が陸奥国分寺を再興した際に建立された薬師堂（国指定有形文化財）と、仁王門（県指定有形文化財）があります。また、平成 27 年には松尾芭蕉のおくのほそ道に関連して、名勝「おくのほそ道の風景地」に指定されています。

図１　古代の陸奥国分寺の伽藍配置と調査区位置

陸奥国分寺鐘楼について

陸奥国分寺鐘楼は仙台市登録有形文化財に登録されています。現在の鐘楼の建立の詳細な時期は不明ですが、江戸時代には建てられていたとされています。『奥州仙台城絵図』（正保２年〈1645〉）の陸奥国分寺には薬師堂と一緒に鐘楼が描かれており、江戸時代の初めの頃には境内には鐘楼が存在していたと考えられます。絵図に描かれている鐘楼は二階建ての入母屋造の建物で、瓦葺きです。江戸時代に描かれた『奥州名所図会』からも当時の鐘楼が瓦葺きであったことがわかります。また、解体時の調査から柿葺きの時期があったこともわかっています。

写真１　解体前の鐘楼（北西から）



※現在、長床は残っていません。

図２　『奥州仙台城絵図』（正保２年〈1645年〉）
仙台市博物館所蔵

陸奥国分寺鐘楼の発掘調査の成果

鐘楼の建物内部では、礎石12基を確認しました。東西は２間、南北は３間で、礎石の中心で測った石間の距離は東西で約160㎝、南北で約190㎝です。礎石は大きいもので径が105㎝近くあり、建物規模からみると大型です。礎石は鐘楼の柱の太さ（径21㎝）に対して大きいことから、古代の陸奥国分寺の建物等の礎石を転用した可能性も考えられます。礎石の多くは安山岩ですが、一部石材と形状が異なるものもあり、中には熱を受けて表面がはがれているものあります。また、いくつかの礎石には柱の墨付けが確認されました。さらに礎石には掘り方と根石が伴っていることが確認されました。

袴部分の土台がのっていた縁石は幅15㎝の凝灰岩の切石を使用しており、建物の周りに設置されています。縁石の規模は南辺で6.7m、西辺で7.7mあります。また、南辺では、川原石が並べられた上に縁石が置かれており、縁石の構築方法がわかります。

土間を掘り下げたところ、建物内部の中央から南側にかけて大量の川原石とともに古代と近世の瓦の破片が確認されました。また、東辺の中央部では鐘楼のかつての出入口を確認しました。出入口にはやや細長く大きめの川原石が「コ」の字状に配置されています。解体前の鐘楼の出入口は西側にありましたが、建物の解体時の建築部材の調査でも出入口がかつて東側にあったことがわかっており、発掘調査でもこのことが確認されました。

写真２　鐘楼土間の確認状況（南から）

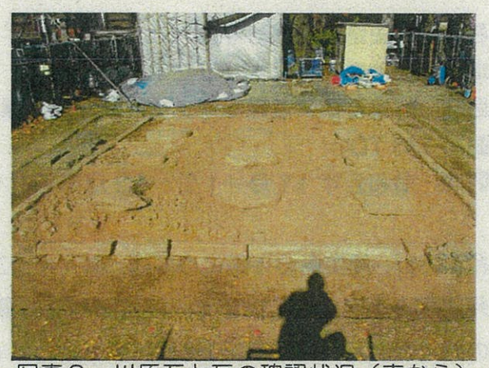


写真３　川原石と瓦の確認状況（南から）

写真４　礎石と掘り方（西から）

写真５　かつての出入口を示す石（東から）

調査のまとめ

- 江戸時代に建立された鐘楼の解体後に発掘調査を実施し、建物の基礎構造を確認しました。
- 鐘楼内部の土間を掘り下げたところ、大量の川原石や古代と近世の瓦の破片が入れられており（写真３）、さらに礎石には掘り方と根石が伴うことがわかりました（写真４）。平成17年に発掘調査が行われた仁王門では基壇は土を重ねて構築されており、仁王門と今回調査した鐘楼では建物の基礎構造が異なることがわかりました。
- 解体前の鐘楼の出入口は建物の西側にありましたが、発掘調査によりかつては東側にあったことがわかりました。（写真５）。